

口絵解説

本巻の口絵には、波多野華涯の曾孫に当たる小田切マリ氏のご厚意により、波多野家伝来の花蹊書簡を収録するを得た。

1、「四季花卉図」(跡見学園蔵)

掛幅一軸。絹本着彩。

縦百七十四・五cm×横百cm。

箱書、蓋表「四季花図」、蓋裏「明治十稔丁丑七月／花蹊跡見瀧女史画

跡見 (朱文方印、陰刻) 華蹊 (朱文方印、陽刻)
瀧印 書畫

(いずれも花蹊自筆)

制作年、「明治十稔七月」

署名、「花蹊女史写并題」

印記、跡見 (朱文方印、陰刻) 華溪 (朱文方印、陽刻)
瀧印 書畫

関防印、桃李不言 (朱文方印、陰刻) 遊印、家在神 (朱文橢円印、陽刻)
下自成蹊 京鴨河西

「桃李不言下自成蹊」(「桃李不言^{ものいハ}下自成^ラ蹊^{スラ}」)

「桃や李は自ら何も語らないが、その花や実の人々が集まり、その下にはいつしか小道ができる」の意

出典

『史記』李將軍列傳第四十九

「家在神京鴨河西」(「家^ハ在^リ神京鴨河^ノ西^ニ」)

出典、参考 「家在^ス」は、漢詩に例が多い。

「家在蝦蟆陵下住」(白居易「琵琶行」、『白氏文集』卷第十二)

「家在江南黃葉邨」(蘇軾「書李世南所画秋景」、『蘇東坡詩集』卷二十九)

「家在牛欄西復西」(蘇軾「被酒独行徧至子雲威微先覺四黎之舍」、『同』卷四十二)

「家在清溪第幾峰」(秋厓「武夷山」、『聯珠詩格』卷一)

「家在明星巖下」(梁川星巖印文、『深川星巖全集』卷一)

題文は以下の通り。

宋初徐熙黃筌皆善画四

季花卉筌但以輕色染成

不見墨跡露花風葉清艷
逼真 熙則以墨筆画殊草
草略施丹粉而神氣却生
動 今余仿黃徐二子法而
斟酌画桜花芍薬紫藤薔
薇瞿麥積雪草芙蓉牽牛
紫苑南燭寒菊蔦葉写生之
妙雖則或讓二子亦別自有所
出新意試問有古来画四季花卉
以桜花具数者乎否 以桜花具数
者乃自 大日本花蹊跡見氏始
矣

明治十稔七月花蹊女史写并題

宋初徐熙黃筌皆善画四季花卉。筌但以輕色染成不見墨跡、露花風葉清艷
逼真。熙則以墨筆画殊草、略施丹粉而神氣却生動。今余、仿黃徐二子
法而斟酌、画桜花芍薬紫藤薔薇瞿麥積雪草芙蓉牽牛紫苑南燭寒菊蔦葉。写生
之妙、雖則或讓二子、亦別自有所出新意。試問、有古来画四季花卉、以桜花
具数者乎否。以桜花具数者、乃自大日本花蹊跡見氏始矣。明治十稔七月、花蹊

女史写并題。

花鳥画で有名な、蜀の黄筌（鉤画法を大成）および五代の徐熙（没骨画法を創始）に描法に倣って花卉図を描くが、図中に桜花を加えたのは、日本の跡見花蹊を以て嚆矢となすと自恃する。

なお、明治十年第一回内国勸業博覧会出品目録第三区美術に「掛物（一）絹地、彩色 草花之図 中猿樂町 跡見花蹊（ママ）」とあるのは、本図のことと推定される（青木茂「日本近代の女流画家と跡見花蹊」、『にいくら』No. 1、平成八年）。

2、〔波多野善四郎宛書簡〕（小田切マリ氏蔵）

卷紙一紙。朱刷り書簡箋（縦罫線入り、天地に雷文繫模様）。紫筆。封筒欠。

縦十七・三 cm×横七十六 cm。

執筆年、明治十二年頃。

釈文は、以下のとおり、

尚々、時氣折角御厭被遊候様、奉

祈望候。乍末、御一同さまえよろしく

御鳳声願上候。

炎熟（熱）残威不可堪候へ共、朝暮

稍秋色相催候処、愈御揃

御隆盛、抔喜之到奉存候。随而、闔家

一円、無異消光罷在候間、乍憚

御休神下され度候。さて平常ハ

大疎濶打過、多罪々々。陳者、

お元さま、御勝さまニも日々学事

御研究、追々御上達、大慶之到ニ候。

然而、過日貴君様より御元さまへ

御書面之起（趣）ニては、是迄学費も

滞候事故、一先帰坂可致様

仰被越候由、お元さまより始而承り、

実に驚愕之到ニ存候。予而

承り及候にハ、父様より御書面之

毎々、只々師恩を忘れぬ様、是

第一といつ御書面ニも有之、御親

父様の御教訓、能々御まもりニて

師ニも能くつかえ、其上諸学業も

御上達故、今二、三年之処、御滞

学ニも相成候ハ、急度立派ニ独

立も出来候と、日々芝蘭玉樹

之如く楽しみ居り候処、豈料、

学費決算不済故、一先帰

坂可致とは如何之御思召ニや、

難解候。お元さまハ助教も中々

よく従事して、師匠之片腕とも

可相成御人故、昨年来学費も

御断申、少々ながらも助教の給

料之心持にて、又々其内別段ニも

給料差上度筈ニ御坐候。尤

学費之滞ハ、おかつさまの分

のみに御坐候。お勝さまも追々諸事

御上達ニも相成候事故、学費

之処ハ今暫時の処ニ御坐候。

今二、三年の処、実に大事之

〔帰坂の件〕

場合故、先々此事ハ私一切

御留申上候。折角是迄之御苦

辛も無に成候事故、御帰坂の

事ハ断然御断申上候間、不悪

御承引下され候様、奉懇願候。

お元さまニおゐてハ中々どこ迄も

仕上る御心底、今親公より彼是

仰せられ候てハ無益之到ニ御坐候。

夫ゆへ此程よりも、涙なから私え

種々御咄しの事も有之候テ

始て驚々入候事也。夫故、学

費之処も可成様ニして平

常御心懸下され候ハ、今差

当り御済算ニは及不申候。

右之次第、篤と御考下され度候。

先私の心中のみ申上候也。

頓首不一

九月十三日

花蹊

拝

波多野善四郎様

波多野善四郎は、水戸藩の脱藩浪士で、後大阪にて銅商を営んだという(波多野家の伝承)。

勤王派の伝手を頼つてであろうか、善四郎は、二人の娘、元子、勝子(三勝)を大阪より遙々、

跡見へ入学させた。元子は、明治八年十一月の開校と同時に入学し（十三歳）、十三年（十八歳）に跡見を出ている。元子は、幼にして画技に優れ、明治九年（十四歳）花蹊に伴われて陛下の御前で、「海棠孔雀図」を揮毫し、「後生畏るべし」とのお言葉を賜ったという（小田切マリ『波多野華涯の世界』平成十七年）。本書簡は、花蹊が元子の才を愛し、学業が途中で已むことを惜しむあまりに、父善四郎に宛てて学業継続の必要性を説いたものである。元子は、後、花涯（華涯）の号で南画家として大成、花蹊の門下で専門の画家となったのは、この華涯くらいであろう。華涯は、父の手紙と本書簡を含む花蹊の手紙九通を一纏めにし、「のし華涯」として和紙に包んで、大切に保存し、終生父と花蹊の恩義を忘れぬように努めている。また花蹊も自分の果たせなかった画の道に華涯が精進しつづけたことが嬉しかったのであろう、花蹊逝去にいたるまで渝らぬ師弟愛が続いた。

花蹊が紫墨を用いているのは、明治十二年から十五年の間である。華涯の年齢も併せ考えて、本書簡を明治十二年頃と推定しておく。

3、「跡見花蹊写真」（花蹊記念資料館蔵）

ゼラチンシルバー・プリント。白色型押し台紙へ貼附。保護。パラフィン紙、二つ折り灰色保護表紙付き。

縦十・六cm×横七・六cm（写真面）

撮影年、明治初期

撮影者、「府下天下茶屋聖天坂下 白水館 白井」

大阪在住時の撮影と思われるが、印画形式・台紙等から判断して、後年（明治後期か）の焼き増し写真かと思われる。